

資料涉獵余話

その94

昭和初期、意外な人物が天龍峽を訪れている。哲学者の三木清である。三木が来峽したのは、昭和四年と翌五年というから、彼が三十二〜三十三才頃のことである。

哲学者三木清（一八九七〜一九四五）は、京大卒業後ドイツへ留学し、ハイデッガーの影響を強く受けた。帰国後、大の教授を歴任。始めマルクス主義哲学を研究し、後に西田哲学に接近したとい

る。場所は、仙牀盤上である。早春の陽を浴びて、盤上の一隅に腰を据えた洋服姿の三木と、和服姿の館主原貞造が写っている。

原が和服着流しなに対して、三木が京市外杉並町高圓寺

一枚の写真から ⑤

三木清の天龍峽来遊

鎌倉 貞男

なお、妻喜美子は農業経済学者の東畑精一博士の妹である。氏は、農業基本法・米価審議会など戦後の日本の農政に貢献し、文化勲章も受章している。

三木は独身生活の最後を天龍峽で過ごしたことになる。年齢もさして違わない館主の原は、長期滞在した三木とかなり親しくなり、右のこと

も聞き知っていたであろう。だからこそ、こうした写真を撮影したのかも知れない。

『三木清全集』岩波書店・昭和六十一年刊）所載の年譜によれば、二月十四〜十六日の三日にわたり、伊那で講演した木が講演したことが記述がある。また、『上伊那教育会沿革誌』（上伊那教育会・



仙牀盤上の三木清（右）と宿の主人原貞造

に、三木の「御地滞在中はいろいろお世話になりました。今朝無事帰京しました。皆さまへよろしく。御発展を祈ります。二月十七日」という仙峽閑苑札状が遺されている。

両者を総合すると、三木は上伊那講演の前に天龍峽に来遊し、仙峽閑に滞在したと考えるべきだろう。

ともあれ、この来峽と来泊は、三木の哲学的思索を深めるに足るものであったに違いない。

（故人敬称略）

二回目の来遊は、翌五年二月である。

一方、今村家から寄贈された資料の中